

Title	はじめに：空間と文化をめぐる断章
Sub Title	Preface : notes on space and culture
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.119 (2008. 3) ,p.i- iii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集文化人類学の現代的課題II
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000119-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

—空間と文化をめぐる断章—

鈴木正崇

本特集号では、「文化人類学の現代的課題」と題した特集を組んだ『哲学』107集（2002年1月）以来、ほぼ6年ぶりに、文化人類学や民俗学にかかわるテーマを主体とした論文を集めた。今回は、全体を2部構成に分けて、第1部「空間の表象」、第2部「民俗宗教から観光研究まで」とした。いずれも現時点での最新のテーマへの取り組みを考えたのである。

第1部「空間の表象」では、最近になって大きな変容を遂げつつある空間の研究に対して、文化人類学や民俗学はどのように対応できるかという観点から、論考を集めてみた。

目的は、宗教学や日本民俗学が蓄積してきた地域研究の成果を、イメージと現実の間を揺れ動く「空間の表象」を通して生成・消滅・再創造するという観点から再考することにある。特に、1990年代半ば以降に展開してきた空間の消費や空間の生産の観点を取り込み、人々の実践と土地との関わりを通して構築される、重層的で複合的な現代的なコスモロジーの構成原理を明らかにする。具体的には「巡礼」「祝祭」「交換」「記憶」「芸能」などを、「空間の表象」の主題のもとに統一的に把握して民俗を研究し、「空間の宗教性」を明らかにするとともに、動態的な地域研究に基づいた民俗宗教とその展開の研究を目指した。本研究は、前提条件として、①対象を社会的・歴史的な文脈の中で理解する、②当事者の意図や観察者の状況への関与を重視する、③厚みのある日常実践の社会的過程をみていく、の3点を設定し、空間と宗教をめぐる動態的な記述と理論化を試み

はじめに

ている。研究拠点としては、東日本では山形県遊佐町、西日本では福岡県篠栗町を設定し、前者では鳥海山の周辺の祭祀や民俗芸能を、後者では新四国霊場の巡礼や寺社の祭祀を主題として研究し、比較の観点から、芸能は静岡県森町、巡礼は四国霊場、交換は長崎県長崎市の出島、記憶は石川県気多・気比、沖縄県那覇市、静岡県南伊豆町も研究対象とした。これによって、空間概念を地域の多様性の下で、現代的視点から考察して、動態的な民俗学・文化人類学の構築へと展開する道筋を探る。

第2部「民俗宗教から観光研究まで」では、キリスト教を民俗宗教として捉えて日本や台湾での地域への適応や読み替えを考える研究や、韓国での親族とジェンダーに関する歴史人類学的研究、インドネシアでの観光と芸能の新たな展開を考察する諸論文を収録した。論考の各々は多様であるが、宗教にせよ観光にせよ、最終的には、文化人類学や民俗学が自明視してきた文化概念の再考を意図していると言ってもよいであろう。文化は衣食住などの日常生活から祭りや芸能など非日常の時空間までを含み、生活様式や思考様式も意味する多義的な概念であるが、文化は伝統の維持と保全の核として機能してきたと説明されている。しかし、現代では文化が新たな創造や再創造の基盤や資源となり、モノ・ヒト・情報の流通が加速化して、異種混淆して越境する民衆文化となって展開している。文化の客体化や外在化として取り上げられてきた現象が顕著になり、元来は生活の中に埋め込まれてきた文化が、対象化され操作されて、観光や開発に流用され、文化のディスプレイ化が起こっている。これによって生じた文化の再編成や新たな創造へ向かいつつある状況をどのように考えるかは現代の最も重要な課題の一つである。また、世界遺産の拡がりによって資源化の動きが始まり、文化ナショナリズムや文化格差を生成するといった現象も起こっている。本特集では収録できなかったが、移動や移民の増大によって、民衆文化が越境して、トランス・ナショナリズムやエスニック・アイデンティティの表出として祝祭空間が創り出されている。

文化という概念は近代の産物で、実体概念ではなく、相対的に構成され、定義は難しい。他者との出会いを通じて、自己の中に他者と異なるものを発見し、それを固有のものとして解釈することで、「文化」は成立する。言い換えれば、自己のあり方を自省し、描き出された自己を自らの中に組み込む、そして我々と彼らの間に境界を引き、重要な社会的意味を帯びる、その時に「文化」は成立する。境界の引き方、自己の描く自己、他者の描く自己、自己の描く他者のせめぎあい、その相互作用が「文化」を構成するのである。しかし、文化の創造と流用、あるいは誤用と応用によって人々の生き方は変わっていく。文化人類学にとって、文化の概念が転機を迎えている現状をどのように打開するか、模索が続いている。

本特集は、以上述べてきたように空間と文化を再考することで文化人類学の今後のあり方を展望する意図を持っている。

2007年12月

付記

本特集に収録された「空間の表象」の諸論文は、平成18年度・19年度科学研究費補助金・基盤研究C「空間の表象に関する宗教民俗学的研究」（課題番号:18520053. 研究代表者: 鈴木正崇）による研究成果の一部である。なお、遊佐の調査では、『遊佐民俗調査』（平成16年度～18年度. 研究代表者: 神田より子）、篠栗の調査では、フランス国立極東学院との共同研究『ウチとソトの相互力学—外部性による社会と文化の創造』（2005年度より継続. 研究代表者: アンヌ・ブッシィ）の援助も受けた。多大の援助に関して、関係各位に御礼申し上げる次第である。